IOPヨーロッパセンター主催特別講演会より

成人化していない社会における男性性の危機

ホルスト・エバーハルト・リヒター
山崎達也　訳

1．ベーコンが考えたユートピア

イギリスの哲学者フランシス・ベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）が、今から四〇〇年前の近代初頭において、《新アトランティス》というユートピア的国家というかたちで、有名な自らの未来像を繰り広げ始めました。そのとき彼は「男性的な」時代が間近に迫っていることを確信していました。

そのときには、三〇〇年にわたる魔女狩りが、完全にではありませんでしたが、ほとんど消滅していました。そこでベーコンをはじめとする他の指導的知識人たちは、それまで女性に与えられていた魔力を、合理的な認識に基づいて、取り払うチャンスだと考えたわけです。知性によって導かれた男性的意志が、情動と激情の内面世界を理性（Ratio）によって遮断したということは、同時に、魔女を監視する必要がなくなったことを意味します。三〇〇年もの間、このような魔女狩りが行われていたのはヨーロッパであり、そのなかでもドイツは主導的な役割を演じていました。つまり、ヨーロッパで行われたすべての魔女狩りの半分は、こ

こドイツで行われていたのです。

自然を科学的に征服する道を歩むための手形を理性に譲渡するために、情動的なるものの全領域がいわば蚊帳の外に置かれることになったのです。人間におけるこうした内部分裂の過程は、性の役割が不変のものとして承認されたということに表れています。すなわち、男性が技術的に応用された科学をもって自然を征服することに従事し、他方、比較的子どもっぽくそして未熟で情緒不安定にみえる女性に関しては、その活動範囲は家族、愛、教育、援助ということに留め置かれることになったのです。男性と女性とのこうした分割は自然の成り行きのように思われました。

それでは、ベーコンの未来国家《新アトランティス》とはどのようなものだったのでしょうか。その国は飛行機も潜水艦も保有しています。風は、今日でも行われているように、機械によって受け止められます。人工的に雨や雪を降らすことができます。嵐や洪水を予測することができます。海水から塩分を抜いて真水にすることが普通に行われています。好みに応じた匂いや味覚の物質を作ることができたり、食料を腐らせずに保存することができます。新しい薬を発見するために、また外科手術の技術を高めるために動物実験を行ったりします。難聴には補聴器が有効であるとされます。超高層ビルは〇・五マイルの高さまで聳え立っています。これはすなわち、アラブ首長国連邦で現在建設中の《ブルジュ・ドバイ》が七〇五メートルという世界一の高さになりますが、それと同じ高さにまで聳え立っているということです。

以上のことから考えると、ベーコンは、ルソーそしてフランス革命やロマン主義を通り過ぎて、大きな飛躍をなしたことが理解できるのではないかと思います。しかし科学・技術的革命を先取りしている精神とはどのようなものなのでしょうか。ベーコン的な意味でいうと、その精神は純粋に男性的なものです。男性は支配的であろうとするからです。ちなみに《スーパーマン》という名称はベーコンによって考案されたものです。

ベーコンは、感情の世界から表れ出てくるすべての

動向を弱いもの、《女性的》と見ています。彼が書いた五八本の主な論文には、女性に特筆すべき役割を演じさせているものは一本もありません。愛を愚行の子であるとさえベーコンは称しています。愛と知恵とはお互いに受け入れることのできないものであって、そのことについて彼はギリシア人の作家プルタークを使って説明しています。大きな精神と大きな行為は、弱さのかたちとしての愛を門の外に締め出してしまうわけです。ここが「強さへの崇拝」が始まるときなのです。男性は自分自身を超えて成長しようとし、世界を新たに作ろうとし、もしくは作り変えようとします。

ベーコンは、後にニーチェが語ったように「神は死んだ」とは述べてはいません。ベーコンはむしろ、神をしっかりと維持するようにすすめています。しかしそれは、人間がいわば神の代行者として犬をしつけたように、神によって人間が教化され、高められることが理由です。つまり神は教育の役に立つ助力者として位置づけられているのです。ベーコンは、男性が神の似像それ自体の全能と壮大さを自分のものにする途上にあるとみているわけです。

しかしそうなると、道徳はどこにあるのでしょうか。ベーコンの場合、特別な場所が道徳に与えられているわけではありません。ベーコンは、マキャベリから刺戟を受けて、出世意欲に歯止めをかけることはほとんどしませんでした。後に彼は、贈収賄事件に関わることになり、自分がそれまで他者に行ってきたことと同様の冷酷な処置を施されることになるのですが、実は以前には彼は陰謀や奸策を用いて、無給だった《聖堂参事会員》から《司法長官》へ、そして《国璽尚書》、最後は《イギリス王国の上流貴族》にまで登りつめていました。

しかし彼はやがて塔に監禁されてしまいます。ナルシス的なスーパーマン幻想という高慢さの背後に、突然にして深淵が口を開けたのです。こうした転落は、《女性的》として拒否された社会的結合力、すなわち謙遜、羞恥そして畏敬の精神を分離したことの論理的帰結であったように思われます。ベーコンのユートピア世界の中に、私たちの現代に通じる実に多くのこと

が見出されることから考えると、彼の運命の中に私たちへの警告が含まれているのではないかと勘ぐりたくなります。結局のところ、腐敗が心理的にも物質的にも現代社会の最上部にまで及んでいるということになってしまいました。

2. フロイトが囚われた偏見

四〇〇年後の今日、ベーコンが予言した科学・技術革命は、とっくの昔から全盛を迎えています。実際、男性がさまざまなことを発見し発明することを考えると、通常の意味で進歩してきたのは男性でしょう。ジークムント・フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）は、一九三〇年になっても、生まれつき家庭のために、そして性的能力を発揮することに運命づけられているのは女性であり、それに対し、文化活動を推進するのはまぎれもなく男性であると主張しています。フロイトによれば、女性というのは十分に純化されていないので、情動を精神エネルギーの代わりにしてしまうというのです。これをフロイトが述べたのは一九三〇年のことなのですが、フロイトの弟子である多くの精神分析家は、この見解が今日ではそれほど適切なものとは言えないところから、このことについては沈黙を守っています。しかしフロイトの著作『文化への不満』（*Das Unbehagen in der Kultur*）のなかで、彼は私が今述べたことをそのとおりに書いていることを確認しなければなりません。フロイトはそれどころか、女性から多くのエネルギーを奪い取られることのないようにと警告さえしています。それに関連して言えば、フーフェランド（フロイトよりも一〇〇年前に活躍した有名な医師）が言い出して、その当時一般に知られていた偏見、すなわち各個人にあるエネルギーは一定であって、それが性的能力に使われてしまうと、精神の作業をするには足りなくなってしまうという偏見にフロイトは囚われていたのです。

しかし私たち全員がすでに知っているように、今の時代はまったく違った状況になっています。ですから、男性性（Männlichkeit）と女性性（Weiblichkeit）ということに関する定義づけを考え直さなければならないので

す。今日では、女性は政治、経済そして学問の分野においてもキャリアを積んでいますし、さらには酸素ボンベなしで八〇〇〇メートル級の山に登っている女性も数多くいます。重職に就いても、女性は傑出した指導的資質を発揮しています。仕事をやり遂げる女性たちの力は、伝統的な役割という優越性にもたれかかっている多くの男性たちの立場をぐらつかせているのです。しかもその男性の優越性ということも、あまりうまく機能してはいないのです。

『男性であることに対する指導』（*Anleitung zum Männlichsein*）というタイトルを持つ書物を著した二人の作家アンドレアス・レーバートとシュテファン・レーバートは、男性がふたたび男性となるときが来るであろうと、はっきりと述べています。では、どうして男性は男性ではないのでしょうか。それは、男性には自立性が欠落しているからなのです。たとえば、男性は独立しているように見えますが、しかし自分に自信を持てなくなってしまうと、たちまち不安に陥ってしまいます。その証明はこうです。すなわち、男性は新しい女性から援助してもらえないかぎり、今の女性から離れることはできないということです。それに対し女性のほうは、たとえその後独りぼっちになることがわかっているとしても、別れることができます。これはたしかに一般的に妥当するわけではありませんが、おそらくまったく外れているとも考えられません。ですから、このとおりに受け取れば、男性はすぐにでも訓練して、もっと自信を身につけるべきではないかと思うのです。

3. 依存性という問題

さてここで、私は精神分析家ですので、深層心理という次元にまで降りて、《依存性の問題》（依存性の不安あるいは依存性に対する抵抗）を原理的に考えさせていただきたいと思います。女性は結びつきを必要とするものとして述べてきましたが、その一方で、男性の特徴として、先にお話ししたように、見せかけの独立性をあげました。しかしこのような事態はどのようにもたらされてきたのでしょうか。

そこで、現代を予言した先行思想家であるベーコンにもう一度戻ってみたいと思います。私がベーコンを弱さの軽蔑者として見なしたことを思い出していただきたいのですが、実は彼はそれどころか、愛の軽蔑者でもありました。というのは、愛は一つの弱さであり、科学によって権力へとよじ登ることを妨害するからです。ところで、信仰への服従を制限し、〝未成年期〟から解放される道として科学を利用することを個人の段階で決心したのはルネサンスの時期でしたが、そのとき、女性は信仰をさらに強く保っていたのに対して、時代を先取りして走っていたのは男性でした。男性は征服者となり、そして発見者となりました。こうしたことを踏まえてフロイトは、すでに述べましたように、一九三〇年においても、文化的事業を推進していくのは男性であって、それを阻止しようとする、女性の「結びつきへの要求」に男性は屈してはならないと警告したわけです。つまり自分のほうが大人で、女性はまるで子どもと同じであると男性には思われていました。

しかしそこに弱点があるのです。つまり、このような男性における男根期のナルシズム的な上昇志向は、自己解放への大きな飛躍なのか、それとも子どものときの残滓で現在も残る依存性の否認にすぎないのではないか、それとも人間存在の本質的特徴なのか、ということです。自分自身が「結ばれている」ことについて男性はなにも知ろうとしないために、独りぼっちになったときに簡単にパニックに陥ってしまうのに対し、女性は自分が結ばれていることを《知り》、そのためにその結びつきを頼りにしています。だからといって、女性は男性よりも自信を持てないとでもいうのでしょうか。簡単に言うと、私たちのすべてはお互いに依存しあっているのですが、そのことを知って受け入れているのは女性だけであって、男性はそのことを知ろうとしないので、そのために代償を払っているというわけです。

4. ニーチェがかかった病

私は精神分析家として、時代精神の典型的な特徴を明らかにするために、よく人間を実験台として使用し

ます。現代における権力欲を哲学的道標として、比類のない極端なかたちで提示したのがフリードリヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）です。ニーチェはスーパーマン・ツァラトゥストラを主人公として描いていますが、それが彼自身の理想的な自画像の投影であることは容易に理解できます。このツァラトゥストラは巨大な権力意志の擬人化です。たとえば次のように書かれています。引用します。

「善とは何か。それは人間のうちにある権力の感情、権力への意志、権力それ自体を高めるものすべてである。悪とは何か。それは弱さに由来するものすべてである。」

「弱者や出来損ないは没落すべきである。これがわれわれの人間愛の第一法則である。しかも彼らが没落するように、助けるべきである。なんらかの悪徳よりも害を与えるものは何か。それは出来損ないや弱者への同情である。」

私の世代は、このような権力妄想、誇大妄想そして絶滅という妄想を、恐ろしい結末を伴う行動原理として思い知らされております。しかしこのツァラトゥストラ＝ニーチェの裏側は、彼の伝記を読むことによって暴かれることになります。ニーチェという人物は、両手で抱きしめるように彼を溺愛した母親から生まれた天才的な息子であり、現実的には男性としての発育という点では遅れてはいました。その母親の束縛から逃れることができたのは、ただ誇大妄想的な幻想や文章を書くことによってでした。ニーチェが、彼の生涯ではじめてそして唯一、一人の女性への恋の炎を燃やしたとき――その女性がルー・サロメでしたが――しかしその恋は母親と妹に摘み取られ、激しく非難されてしまいました。彼はすぐさま一八〇度反転し、彼らに降参し、やがてうつ病になってしまったのです。それに関しては、デンマークのヨルゲン・クヤールがニーチェに関する著書のなかで、次のように述べています。

「人類の教師として現れる人は、自分が悪いことをしたと母親と妹が思っているのではないかという考えにもはや我慢できない。それほど、ナルシズムの幻想的な感情の典型と反応の典型に囚われている。そしてさらに、ニーチェの代弁者としてのツァラトゥストラの口から語られる究極的な目的は、自主、権力、能力、愛の力などではなく、失神、絶望、無能力、才能の無さを愛することなのである。[1]」

しかし、この重いノイローゼにかかった哲学者は、いかにして世代を超えて、その影響力を保ち続けることができたのでしょうか。彼はけっして快適ではなかったけれども、ありのままの自分でいられました。しかしニーチェは、『神コンプレックス』(*Der Gotteskomplex*)のなかで私が詳細に論じたある不足、すなわち「悩めない病」(Krankheit, nicht leiden zu können)にかかっていたのです。この病は、基本的には、近代の男性がかかるものではないかと思われます。つまり、ただ征服し、打ち負かし、上昇志向のためだけに現われるが、しかしいったん下に落ち、小さくなってしまうことに対して多くの不満を抱いてしまうことで、自分を支えてくれる母親の手を必要としている男性がかかる病気です。これは、アンドレアス・レーバートとシュテファン・レーバートも考えていることですが、つまり、自らの心のぐらつきさえも見せることなく、力強く登場してくる男性は、いったん孤独に陥ってしまうと、頼るものがなくなってしまうのです。彼に必要なのは母親であり、非常の場合には、自分自身のなかにもはやない支えを与えてくれる、母親としての女性なのです。

5. 内面の補整器としての技術

さて、ここで文化心理学的な回り道をしたいと思います。男性は「悩むこと」を学ばず、つねに過剰補償的に征服しようとする行動によって、自らが抱いている不安に対し、体裁をつくろっています。このことによって私たち、そして私たちの社会に、いかなる危険が迫ってくるのかということを考えてみたいと思うの

です。

第一にしなければならないことは、このような危機を認識し、幻想を見破るということです。技術革命という征服は、私たちに補整器を装備させるかもしれません。その補整器とは、欠如している内的な支えをただ補整するだけではなく、私たちを一種の補整の神々にしてしまうものです。これもフロイトの言葉ではないかと思うのですが、その意図することは、私たちなかんずく男性は、自分が望んでいるほど強くはないのだということ、どんなに強く思いこんでも、そうはなれないのだということを学ばなくてはならないということです。そのために私たちはいま、技術を手にしたわけです。ところで技術を使って人間を〝品種改良〟できるとなると、実際に遺伝子技術で遺伝子メニューから子どもを望みどおりに準備することも可能になります。

さらには、とてつもない強さを持つ核爆弾を造ることができるならば、この権力手段は、本質的には消滅しかかっている、もしくはすでに存在していない男性の権力あるいは権力欲を代用できるのではないかと思われるでしょう。

ますます速く大きく力強くなり、さらに高い塔を建て、さらにすごい兵器を造ることによって、自分たちはこのような欲望の頂点に立つ男性、すなわち徐々に全能に近づき、より強くなっていく男性なのだと信じることは、大いなる幻想です。というのは、こうした補整器は、自分自身と他者との融和を人類にもたらすことはないからです。その代わりに男性は、もはや女性の愛のエネルギーを恐ろしがるのではなく、献身と結合とを勇気をもって自分自身で学ぶべきだと思うのです。というのは、このことから、男性は社会的競争に打ち勝つだけではなく、自己抑圧のエネルギーを節約できるのではないかと思われるからです。とりわけ、もっと自分をオープンにすることで、自分自身が持っている融和能力をもっと力強く信頼することができるのではないでしょうか。

私は日本の哲学者である池田大作氏の話のなかに、たいへん賢明な言葉を見つけました。すなわち、私た

ちには二つの選択肢しかない。私たちの交わりを人間的なものにする力を信頼するのか、それとも核兵器を信頼するのか、ということです。しかし二つを同時に選ぶことはできません。危機とは、核兵器のもつ「人間を萎縮させる力」を、「人道的に平和を創出する能力の収縮」に対する保険のようなものとして私たちが誤解してしまうことです。したがって、武器の持つ「萎縮させる力」を信頼すると、人間同士、民族同士の諸関係において、安全のために強調し融和することは、私たちには不可能だと信じてしまうのです。

6. 正義の結実としての安全

ところで、グリム兄弟のドイツ語辞典で、個々の単語の意味を調べてみると、その言葉使いの歴史が見事に解説されています。《安全》という言葉の場合、テレビなどでショイブレ氏（Wolfgang Schäuble, 1942-）[2]やベックシュタイン氏（Günther Beckstein, 1943-）[3]や他の人々がこの言葉を使用しているところを耳にすると、すぐに思い浮かぶのは、警察や監視強化などです。しかし預言者イザヤは、安全とは正義の結実あるいは産出であると述べています。私はものごとを考えるときにはいつも、ポジティブとネガティブという分け方をするのですが、ネガティブな立場から《安全》を理解すると、つねに〔何かに対して〕ということ、たとえば〔脅迫に対して〕、〔悪に対して〕というようなことになるのではないかと思います。それに対して、ポジティブな立場が意味しているのは、人間が人間として融和的となり、気持ちを通じ合わせたり、平和構築の完成は人間によって可能なのだと信頼することです。ですから《安全》という言葉はもともと、正義への賛成、すなわち正義の肯定的価値に由来しているのです。

7. 現代における《最後の審判》

核兵器に責任をゆだねることはできません。また核兵器それ自体に責任はありません。核兵器はただ殺害するだけのために存在するのですから、原子爆弾を擁護することには、いかなる積極的な目的もありません。

私はかつて次のように述べたことがあります、すなわち「核兵器によって実現される唯一の結果は、最後の審判の罰を私たち自身に執行するということだと認めなければならない」と。私はここで最後の審判それ自体に言及するつもりはありません。その代わりに、一九四五年に広島であったことを目撃した一人の将校の話をしたいと思います。当時アメリカ大統領であったトルーマンに、自分で目撃したことを報告するために、彼は急きょポツダムに飛んできました。そして彼の話によれば広島の状況はさながら最後の審判のようであり、以前は全能の神しか有していないと信じられてきたさまざまな力が現実的になったようだったというものでした。

しかも彼はこうしたことを勝ち誇ったように語ったのではありません。彼の話によって明らかになったことは、最後のチャンスと力を、いまは人間自身が持っているのだということなのです。そしてこのことが現実となったのが、日本に対してアメリカが実行したことにほかなりません。

8. 良心と責任

私たちは責任をコンピュータにも押し付けることはできません。というのも、コンピュータに倫理を教え込むことは不可能だからです。責任というものは、ただ私たち自身のもっている良心が健全かどうかにかかっているのです。しかしこの良心のことに私たちが気づくのは、私たちがお互いに十分に近づくとき、すなわち私たちがお互いに顔を付き合わせ、何に対して責任があるのかがわかるくらいに近づく時のみなのです。ポーランド出身の社会学者ジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman, 1925-) は、このことに関してたいへん簡潔に、次のように述べています。

「責任すなわち道徳的態度は、他者への近接から生まれる。近接とは責任を意味し、責任は近接である。」

このようなことを聞くと、皆さんもおそらく、今日

たいへん有力な政治家たちを思い浮かべるでしょう。彼らはまず一人の敵対者を見つけると、まるで小さな子どものように振る舞い、その者に会おうとも語り合おうともせず、その者が降参して、敵対したことをすべて取り消し、もう敵対しないと誓わなければならないという状況になってはじめて、その者と会うことを表明します。本来ならば、責任感のある偉大な政治家は、中途半端な状態にしたりせず、また敵対者が降参したら会うことにしようなどと言わないで、その者に近づき対話をすることを、私は期待しています。

9．両親性ということ

さてここで、まったく別な話なのですが、少し私個人のことに触れてみたいと思います。私にはつねに思い出すことがありまして、それは兵士として第二次世界大戦からどのように帰って来たかということです。「家へ」と私は言いたかったのですが、しかし私の目の前に見えるのはただベルリンの瓦礫だけで、家族も両親にも会えない人間の一人でした。

しかし意外にも、その五年前に別れた身近なものを再び感じることができたのです。すなわち、かつて英雄としてかつぎ上げられて戦地へと送られ、大ドイツのために闘い、ドイツを守り、そして勝利を収めて、いつの日か誇らしげに立派になって帰って来るだろうと思われていた男性たちが帰還してきたのです。

しかし彼らは打ちのめされて、肉体的にも道徳的にも疲弊しきって帰還しました。前に幸福だったときに手を差し伸べて助けてくれた女性を見つけ、それでようやく彼らは真の意味で我に帰ったのです。というのは、兵士として戦争に参加するということは、厳密に言えば、自己自身のもとにありながら主体として存在できず、見知らぬところへ連れて来られて、巨大で不気味な破壊装置のなかで自動的に機能する「道具」になることを意味するからです。このことから考えると、非人間的残酷さという最悪の要求を免れた者こそが、幸福について語ることができるのではないかと思うのです。

しかし、そのあとには、全体主義的な監視から解放

された女性も男性も、ふたたび勇気を奮い起こす時期がやって来たのです。いわば、とうの昔から男性の力になってきた女性たちと、苦悩することと弱さを学んだ男性たちとが確信を抱き、新しい共同生活を学び取ったのです。ここで大事なことは、優先されるべきは男性あるいは女性としての可能性を実現することではなく、《家庭》と《共同の出発》だったということでした。

私自身と妻は、私が捕虜から解放され、彼女がプラハから引き揚げてきたあと、数ヶ月間いっしょにいましたが、まもなく子どもの誕生を楽しみに待つようになりました。その当時、ベルリンにあった半壊状態の小さな部屋を一時しのぎの仮住まいとしていましたが、今日では曾父母としてダイアモンド婚を祝うまでになりました。

さまざまな状況が私たちに成長の過程を提供したということは、私たち自身の功績ではありません。しかしその過程のなかで、ある段階――それを私は《両親性》（Elterlichkeit）と呼んでいるのですが――に私たちは到達しました。両親性とはすなわち、他者の生活にも同時に配慮することで、自分たちが持っている可能性をともに実現するということです。そしてこれは、ヒトラー亡き後、できるだけ人間的な社会の構築に貢献しようという私自身の欲求と関連したものでした。

男性にとって残されていることは、もはや「打ち勝つ」ことでも「征服する」ことでもなく、弱さ、罪、羞恥、悲しみ、苦悩そして同情から学ぶことであり、女性とともになにか新しいことを始めることなのです。しかし、すべてを耐えるのを助けてくれるものがあります。それが愛です。今日では、このようなことを言うと、なにかお涙頂戴のように聞こえるかもしれません。しかし、お互いへの深き信頼、自分たちの共同生活を築くことができるという確信として、内からやって来たものをほかに何と呼べばいいのでしょうか。

この共同生活は、《両親性》を短期間のうちにできるだけ馴染ませるチャンスとなっただけではなく、必然でもありました。

私の妻は、精神異常のあるいは異常になりつつある

子どもたちを世話する女性教師二〇名とともに一つのグループを作り――その当時、ベルリンにはそのような子どもたちのための施設が建てられていました――、私は精神異常を来たした子どもの相談所と研究所の教師二九名と行動をともにしていました。しかも私たちは交替で三人の子どもの世話を家ですることになったのですが、これによって、（男性性か女性性どちらかしかもたない）いわゆる〝成人〟になってしまうことから免れるとともに、《両親性》の責任を学ぶことができたのです。

10．ヒトラー時代のトラウマ

私は昨年、家庭セラピーの学会において、ベルリンにおける五〇年代の家庭セラピーが次のような認識に基づいていることを報告しました。その認識とはすなわち、私たちの臨床相談所に紹介された子どもたちは、彼らの両親がヒトラー時代と戦争によって抱いた心的葛藤やトラウマを、そのまま引き継いでいることが特徴として見られるということです。

子どもは両親に喜びを与え、落胆から立ち直らせ、慰め、あるいは自己嫌悪からの解放に対する〝身代わり〟として役立たなくてはならない状況にあったわけです。しかも子どもたちは、パートナー喪失の身代わりとしても、しばしば過大な要求を求められました。これらの結果として生じることはすなわち、子どもの症状の実際の原因が両親であることが判明した場合、両親を子どもと同じ患者として治療しなければならないという必然性です。その間に成長して学生となった者たちに対する病理学的な分析は、私の『親・子ども・神経症』（*Eltern,Kind und Neurose*）という著作で述べました。

書物を通して自己自身をよりよく理解しようとし、自分たちの子どもの教育の負担を軽くしようとした世代は、子どもを持つような年齢に達すると、私設保育所や他の共同施設を作るようになりました。やがて六〇年代後半から七〇年代にかけて、数百の集団的工場で働いている若い世代が徹底して試みたことは、男性は男性として、女性は女性として、子どもは子どもと

して、一世代前の人々とは違ったことができるかということ、すなわち、いかにより解放的に、自由に、同時に協調的になることができるか、ということでした。先日のことでしたが、第二ドイツ放送（ＺＤＦ）の夜の番組で、私設保育所、精神分析を行うための施設、学生寮の改革モデルについて議論が交わされました。このときは、サマーヒル（イギリス）、ビーレフェルトの実験学校（Laborschule）の主催者、私設保育所を批判しているクラウス・フォン・ドーナニー、それを擁護する私リヒターが参加しました。そこで参加者の大多数が思ったことは、あの当時の画期的なことから多くのことを学んだが、しかしまだ学ぶべきことがたくさん残っているということでした。

11. 超自我の継続

さて、男性性の危機ということで私のお話を始めたわけですが、これまでに明らかになったことは、女性がまさに拘束を受け入れることで力を獲得し、より強くなっていく一方で、男性のうわべだけの強さは巧妙に隠蔽された依存性に関係しているということです。

男性も女性もともに、私が《両親性》と呼んでいるものに達することになるのですが、それがより必須なものになればなるほど、いっそう状況は連帯を必要とせざるをえなくなります。そういうわけで、男性はもはや苦悩を女性にゆだねることができなくなり、すなわちお互いが分かち合わなければならなくなるわけです。男性は自らの依存性を承認しなければならないのであって、しかもその依存性を征服することや過剰補償することはできません。

ドイツの戦後における窮乏状況において、男性は支配者として安定するといういかなる機会も手にすることはありませんでした。つまり男性は、自己のうちに習慣的に抑圧していること、すなわち自分は脆弱で貧相であることを受け入れ、自己を完全な意味で打ちひしがれた者とし認めなければならなかったのです。

問題は、集団心理的な操縦の時代、ヒトラー時代、すなわち自分自身から良心を奪い去ることを要求された時代において、男性は何を心のなかに留めていたの

か、ということでした。あるいは、新たな受け容れ、たとえばアメリカナイズされた偽同一性（Pseudoidentitat）にすばやく這い込むことができたのか、ということです。

このことに関して、私の個人的体験を通してお話ししたいと思います。私がじつに不自由で不快な捕虜生活から解放されたのは、オーストリアでした。そこでは、新聞もラジオもなく、半年間、外からの情報はまったくない状態でした。当時、インスブルックは実直な人たちばかりで、自分たちはただヒトラーの下ですべての時を過ごしてきたのだと、まじめに納得していました。というのも、ヒトラー時代、それ以外のことはできなかったからであり、現在は喜んで受け入れられているアメリカ化も、ヒトラーは許していなかったからです。

その後、私はドイツに帰ってきたのですが、そこでもじつに多くの人が、いわゆる超自我（Über-Ich）、すなわちナチス時代に吹き込まれた裁定を、いわゆる良心の代わりとしていたことを、さまざまな方面から知ることになりました。つまり、ヒトラーそしてナチスに服従すると、りっぱな良心を持つことができ、命令されたことがたとえ悪いことであっても、それでもなお、りっぱな良心を持つことができるということです。さらに言えば、命令されたことだけを行うということは、いまアメリカで行われていることだと思います。そういうわけで、「いまこうしていられるように、とっくの昔からそうなっていたのであって、ただヒトラーが立ち去っただけなのだ」と語る人たちは、一年前、最後の勝利を固く信じ、ナチスの忠実な追随者であった人たちといろいろな面で同じなのだということが私にはわかってきたのです。

しかし、ナチスによって以前に支配されていた「超自我」の継続と私が呼んでいるもの、――そして現在の状況に当てはめると、アメリカへのつながり志向――は、多くの人にとって内面における大きな転落だったのです。つまりその人たちは長い間、悲嘆することも、恥じることも、罪の意識を持つこともなかったのです。

その後すぐにやって来たのが冷戦でした。すなわち、すぐにまた今度は、ロシアに立ち向かっていくことになり、その結果、私たちは西ベルリンで前線国家となったわけです。

12. 過剰補償から両親性へ

そこで私の身の上に起きたことといえば、「どうして数年間、本当に変わることなくヒトラーを信じ、最後まで希望を持っているようなことができたのか」という問いが現われたということです。この場合、記憶をゆがめて、

その結果、これは私自身も覚えがあるのですが、「以前に熱狂的に行進に参加し、ベルリンの体育館でヒトラーに歓呼の声を浴びせた自分とは、今ではまったく違う自分である」と思うようになるのです。

これは多くの親にとって一つの問題でした。親はこうしたことを子どもたちにどのように伝えていけばいいのでしょうか。つまり、自分の両親がそもそもユダヤ人に対してなんら憎悪を持っているわけではないし、反ユダヤ主義とはまったく関わりがないことを知りながら、しかしそれは全国民が共有したなにかであったと知っている子どもたちに、両親はどのように語ればいいのでしょうか。

実際には何十万の人たちがホロコーストに手を貸しましたし、一九三八年のいわゆる迫害の夜（水晶の夜）ではシナゴーグに火をつけたのです。しかしながら、私が精神分析家として自分の周辺で観察したことによれば、内面的な浄化が起こらないと、その代わりに、たとえば「私は五、六年前には、現在の自分がそうであるようには許されてはいなかったのであって、現在、再び本来の自分に戻ったのだ」というように、非常に早い時期に〝回復期〟がやって来てしまうのです。このことはまた、多くの男性にとっても一つの問題です。つまり、男性は、ハーメルンの（笛吹き男による）ネズミ捕りの場合のように、言いなりになることを経験し、また、自分自身の良心が能力を喪失した状況のなかで、自己を捨て去らず保持するために、劣悪なことも経験したということです。

いずれにしても、どん底から新たに出発することは、男性にとって大きなチャンスとなりました。男性が幸運に恵まれていた場合には、そこには女性がいて、彼女は男性が男根期的過剰補償に立ち返るのを防ぎ、その代わりに、真実の夫婦の協力関係と共同としての《両親性》に対する尽力をねぎらうという結果になりました。しかしこのことは男女双方にとって、深刻な試練ともなりました。この試練をある程度、乗り越えた人たちは、そのことから夫婦二人の関係と家族の骨格をより頑丈にする可能性を引き出しました。強制的に《両親性》に関与させられた人々が、お互いの信頼関係の基礎が固まるのを体験し、今日の人々は放棄している多くの試練を乗り越えたという事実は、あの当時、大きな役割を演じたのではないかと私は思っています。

13. 新たなる試練

ところで新たな深刻な試練が私たちに迫っています。それは、優先されるべき生活連関問題に私たちが結び付けられていることが、どこまで共通に承認され、そのことを私たちが心に刻んでいるのか、ということです。

すなわち、いくら繕いごとを並べたとしても、地球的規模の自然災害が目前に危機として迫っており、近い将来、黒い影となり、やがては眼を覆いたくなるであろう現実が待ち構えていることです。

フロイトは、苦悩を避けるチャンスがあることを信じていました。「科学技術の助けを借りて、人間共同体の一員として自然に矛先を向け、自然を人間の意志に屈服させることによって、すべての人の幸福に、すべての人とともに従事することになる」。これはベーコンが用いた古い打開策です。つまり、攻撃し、征服し、支配するのは男性であるという意味です。しかし男性はいま自分自身が、「我が物としよう」とする意志の犠牲であることを身をもって知るにいたっています。自然は男性のものではありません。男性が自然に属し、依存しているのであって、したがって自然は男性が否認した依存性を容赦なく知らせるのです。

気象学者たちは、次のように言っています、気温の上昇によって、海岸地帯の広い範囲が洪水に見舞われ、多くの大都市も呑み込まれることになる一方で、乾燥地帯に住んでいる少なくとも十億の人々には、旱魃によって死の危機が迫っている、と。

そういうわけで、男性性が勝利とか征服とかを意味することはもはやありえないことであって、男性性は共同の連帯としての《両親性》によって、女性と対等になっていくことでしょう。しかしながら、こうした意識変化は一朝一夕に起きるものではありません。裕福な人々、力を保持している人々は、権力を意のままにする自由の存在をいまだに信じています。また彼らは、苦悩が貧困者と弱者に振り分けられ、他者の犠牲の上に自らの裕福な生活が維持されていくことを信じ続けています。

しかし、ゴルバチョフ氏も語ったように、「時に遅れる者は、運命に罰せられる」のです。

注

（1）Kjaer, Jörgen, *Friedrich Nietzsche. Die Zerstörung der Humanität durch Mutterliebe*, 1990.

（2）現在ドイツの内務大臣を務めている政治家。キリスト教民主同盟（ＣＤＵ）に所属。

（3）現在バイエルン州の州知事。キリスト社会同盟（ＣＳＵ）に所属。

（ホルスト・エバーハルト・リヒター／フロイト研究所元所長）
（訳・やまざき　たつや／東洋哲学研究所研究員）

ホルスト・エバーハルト・リヒター

精神分析家。１９２３年ベルリン生まれ。１９４９年に哲学博士、57年に医学博士。61年から91年まで、ドイツ・ギーセン大学教授。92年から２００２年まで、フランクフルトにあるフロイト研究所の所長を務める。また１９８１年には、核戦争防止国際医師会議（ＩＰＮＷ）の西ドイツでの創立メンバーの一人となる。現在もなお、イラク戦争にも反対するなど平和活動を

推進している。主な著書に『病める家族――家庭をめぐる神経症の症例と治療』（１９７０。邦訳は佑学社刊）、『神コンプレックス』（１９７９。邦訳は白水社刊）など。２００６年には本講演のもとになった『成人化していない社会における男性性の危機』が話題を呼んだ。

（本稿は２００７年４月14日、ドイツ・ビンゲン市で行われたＩＯＰヨーロッパセンター主催特別講演会での講演をまとめたものです）